

主 題：幸福に降服する3

聖書箇所：マタイの福音書 5章4節

いったいどうすれば私たちは幸せになることができるのか？この質問というのは人間の歴史と同じくらい長い間問われ続けてきた質問ではないかと思えます。この世が私たちに教える幸せの原則というのは、もしかすると私たちがもっている苦しみ、すべての悲しみを横に置いて、幸いなことがら、楽しいことに焦点を合わせることであるということかもしれません。このような原則、そのような考え方というのは、非常に有名な物語であるピーターパンという話に出て来ます。皆さんはご存じですか？それによると、ほんの少しの妖精の粉といっしょに私たちが空を飛ぶために必要なものは、楽しいことを思い起こすこと、英語では **think happy thoughts** と言います。ハッピーにさせることを思い出さないと。そうするとどうなるでしょう？空に浮かび上がるのです。ピーターパンの仇であるキャプテンフックが空を飛べる秘密を聞き出したときに彼はこう言います。何ということだ、私には楽しい思いが何一つないと、だから、彼は空を飛ぶことができなかつたのです。もう少し前になりますが、ピーターパンが大人になったときの話が映画になりました。大人になったピーターパンはやはり飛ぶことができなかつたからです。なぜなら、彼は彼を飛ぶことができるようにさせた楽しいことを思い出すことができなかつたからです。それを忘れてしまっていたから…。なぜ、楽しいことを思い出すと空を飛ぶことができるのかと考えたら、それはこの世が私たちに教える幸せになるための原則に基づいているのではないかと思ったのです。もし私たちの心が楽しいことがらに満ちているとするなら、私たちは喜びに溢れ、すべての束縛から解放され、まるで飛び跳ねる、浮かび上がることができる、けれども、私たちの心に少しでも辛い思い、悲しい思い、苦しい思いがあつたなら、私たちは飛ぶことができない、私たちの心は重いから浮かび上がることなどできないのです。ピーターパンが教える、私たちが幸福になって飛び跳ねることができるその原則とは何でしょう？それは、私たちの心を重くする不幸なことがら、楽しくないことがらをすべて心から取り除いて、私たちが楽しくなること、嬉しくなることだけに思いを寄せなさいというものです。このような考え方というのはピーターパンの話の中だけに起こることではありません。私たちが日本人も言います、「笑う門には福来る」、笑いのある家庭には幸福がやって来ると、基本的には同じことを言っています。聖書は確かに、笑い、笑顔、その陽気さというのが私たちの健康、肉体的な状態に良い影響を与えることを否定はしません。ですから、箴言17：22を見ると「**陽気な心は健康を良くし、陰気な心は骨を枯らす。**」とあります。けれども、もし、私たちが幸せな思いにだけ目を留めましょう、そうすれば私たちは嬉しくなつて、幸せになることができるから、楽しいこと、私たちが喜ばせることだけに思いを留めましょうと、世の中が、ピーターパンが教えたその原則に沿つてこの人生に幸せを求めて行くなら、聖書は間違いなくそれは違ふと言います。聖書は決して、私たちの心から苦しみや悲しみを取り除くことによって私たちが幸せになるとは教えていません。むしろ、聖書が教えるのはその全く反対です。

☆天国に属する人の特徴

私たちはごいっしょに、今日も至福の教えからみことばを見て行きたいと考えています。この至福の教えは山上の説教でイエスが最初に語られた大きなトピックです。どのような人が幸いなのでしょうか？その2番目の説明の中でイエスは天国に属する人の特徴が何かを教えてください。イエスははっきり言います。人間が経験することができる最高の幸せというのは、悲しむ人に嘆く人に与えられていると、そのようにこのことばは訳すことができます。私たちがこの至福の教えからみことばを見て行くときに、私たちはここでイエスが天国に属する者がどのような特徴をもっているのかを教えてください。そこで私たちは二つの質問を今日もします。いったいだれが祝福を受けているのか、そして、いったいなぜそれが彼にとって幸いなのか、どうして幸いと言われるのかその理由、それを考えて行きたいと思えます。それを通して、この御国に属している私たちもこの地上においてそのような特徴をもって生きて行くこと、私たちが天国民としてこのキリストがやがて入れてくださるそのすばらしい御国に今属する者として、どのような生き方をして行くのか、このイエスのみことばを通してごいっしょに考えて行きたいと思えます。

1. だれが祝福を受けているのか

イエスはこのように言われます。5:4「**悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。**」と、このみことばに焦点を当てて行くその前に、もう一度ここまで学んできたことを少し振り返って見ましょう。イエスがなされた説教の中で最も長いと言つてもいいかも知れません。もちろん、ヨハネの福音書には

最後の晩餐のとき、弟子たちに語られたメッセージがあり、多分それが一番長いと思いますが、でも、特に、神の国ということに関して長く語られているメッセージがこのマタイの5－7章にある山上の説教です。そして、その最初にイエスはこの至福の教えをもって来たのです。いわば、このメッセージの序文、イントロダクションとして。このすばらしいみことばの中でイエスが幸いな人がどのような人なのかということをお教えています。覚えておられますか？ここで言われている幸いというのは、私たちが幸せと感ずるかどうかということに懸かっていたのではなかったのです。これは他の人が見て「あああの人には幸せな人だ」と言っている、第三者が見てこの人は幸せだと判断が下されるその幸せです。第三者とはイエス・キリストです。神が言われる幸せな人とはだれかということです。1番目にイエスが言われた5：3はそのようなものでした。「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。**」。心の貧しい者が幸いであるその理由は、その人が天国に入っているから、天の御国が与えられているからだと言います。その人はどんな特徴をもっているのか、それは心の貧しさにあつたのです。では、心の貧しさとはいったい何でしょう？それは一言で言うなら、神の前にあるへりくだりです。これは自分自身霊的なことに関して一切神の前に価値のあることがないと認めた人の態度です。この人は全く希望がないこと、自分自身の内には一切自らを救うことのできるような霊的力をもっていないこと、それをしっかり知っているゆえに、神の前に立って、神よ、どうぞ私を助けてくださいと、完全な貧困の中で自分では生きて行くことができないから、主の前に手を出して、神さま、私を助けてくださいと言っているその貧しさです。一般的にこのようなことが幸いだと思ふことはありません。貧しさが幸いであるなどと人は思わないのです。当時の人もそうだったでしょう。ですから、イエスのこのことばを最初に聞いた人たちはまさに驚きだったのです。何を言い出すのだろうと。

けれども、多分、イエスが2番目のこのことばを語られたときに、人々はイエスはおかしいのではないかと思つたのではないかと思われまふ。最初の「**心の貧しい者は幸いです**」ということばが驚きだとするなら、「**悲しむ者は幸いです**」ということばは何と馬鹿げたことと思つたはずでふ。悲しみが幸いなどとはだれも思いません。けれどもイエスはここで、そのような特徴をもつ者こそが幸せな者であると、そのように宣言されるのです。ですから、ここでそのことについて考へて行きまふ。

2. なぜ悲しむ者が幸いなのか

○霊的悲しみをもっていることが本当の信徒の特徴であるから

「**悲しむ者は幸いです**」とイエスは言われましたが、すでに話したように、悲しみが幸いになるなどということは、この世では決して教へないことです。新約聖書の中には多くの「悲しみ」を表わすことばが出て来まふ。九つほどあります。その中でここで使われている「悲しみ」または「嘆き」と訳されるこのことばは、最も強い悲しみを表わすことばとして数えることができます。そんな激しい強い嘆き、それをもつ人が幸いだと言ふのです。どのようなときに使われるのか、それは最愛の人を亡くしたときに使われることばです。旧約聖書をギリシャ語に訳した70人訳の聖書ではこのことばが、ヤコブが彼が最も愛した息子ヨセフを亡くしてしまつたと思つたときに使われています。また、新約聖書ではマルコの福音書16：10などを見ると「**マリヤはイエスといっしょにいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところにいき、そのことを知らせた。**」と、弟子たちがイエスが死んだことを嘆いているそのときに使われています。最愛の人を亡くした悲しみ、皆さんの中でそのような経験をなさつた方がおられるなら、それを思い浮かべてください。それがイエスが言っている「悲しみ」なのです。私は数回、小さいお子さんの葬儀に出席したことがあります。それほど悲しいことはないと思ひました。家族はその棺の周りで大声を上げて嘆くのです。それがここで言っている「悲しみ」です。イエスはそのような悲しみをもつ者が幸いだと言つたのです。私たちがここで誤解してはいけないことは、そのように愛する者と別れたときの悲しみをもつ人が幸せだとイエスが言っているのではないということです。イエスが言われるのは、最初の至福の教へが肉体的な貧困でなかつたのと同じように、ここでも肉体的な悲しみではありません。それは霊的なものです。この至福の教へで言われていることはすべてが霊的な状態、霊的な態度に関わることです。ここでもそのことを理解してイエスの教へを見て行かなければいけません。

また、この至福の教へを見て行くときしっかりとその文脈も理解して行くべきです。そして、イエスがここで教へていることはイエスのオリジナルではないということにも気付かなければいけません。この山上の説教全体が実は旧約聖書からの引用があるのです。この後、イエスは「わたしは律法を廃棄するために来たのではない、成就するために来た」と言われます(5：17)。そして、この教へは旧約聖書の教へに基づいている神の御国の教へなのだということを、イエスは言ひたかつたのです。この5：4の箇所はイザヤ61：1－3、特に2節に出て来ることばに根源があります。「**神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、：2 主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、：3 シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの**

油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。」、この箇所は実にイエスがナザレの会堂で読まれたところです。ルカ4：18から記されています。その後イエスは「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。」（4：21）と言われたのです。イザヤ61章のこのことばは、イスラエルの罪のゆえに嘆いてその罪から立ち返った人たちの上に与えられる神のすばらしい祝福を記しているその文脈の中に出て来ることばです。この悲しみ、嘆きは明らかに霊的なものです。では、ここではどのような霊的な悲しみというのが言われているのでしょうか？そのことを考えて見ましょう。

○霊的な悲しみとはどのような悲しみか

霊的な悲しみをもつということは、天国に属する人たちにとってなければならない特徴です。

(1) 自分の個人的な罪に対して悲しみをもつ

天の御国に属する人たちは必ず自分自身が犯した罪に対する深い嘆きをもちます。それは、私たちが神の前に全く何も価値のない者であるということをしかり理解した心の貧しさをもった人たちは、必ず得るものでもあります。なぜ私たちはそのような霊的な貧困の中にいるのでしょうか？その原因はまさに私たちの罪にあるのです。それゆえに、この2番目の教えというのは、1番目を持っている人が必ず経験することと言っても構わないでしょう。私は神の前に立つことすらできない、あなたの前に何もさげることができない、そのような霊的貧困の者、霊的に破産した者だと言うのです。なぜなら、私はあなたと私の間に大きな罪という谷を見ることができ、それを越えて行くことができないからと。それゆえに、その人は神との間に深い溝を築いてしまっている自分の罪深さを嘆くのです。神がいったいだれなのかをよく知っていて、また、自分自身がその神の前にどのような者であるのかをよく理解しているがゆえに、その人は神と自分とを離れさせる原因となっているその罪を嘆くのです。ダビデのことばを聞いてみましょう。詩篇32：3-4「私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。：4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。」、罪のことです。罪があったとき私はこんな苦しい思いをしていたのだと言うのです。ダビデは自分自身を霊的鏡の前で見たのです。そこに映っていたのは醜く不敬虔で罪深い、神のきよい基準に到底達することができない、愚かな者だったのです。それゆえに、唯一彼にできたことはその罪を嘆くこと、罪に悲しみを抱くことでした。パウロもダビデと同じでした。ローマ7：24でこのように言います。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」、7章でパウロが自分のうちにある罪との葛藤を記している中で出て来ることばです。ダビデと同じようにパウロもよく分かっていたのです。彼も霊的鏡の前で自分の姿を見たとき、確かに私は救われているけれど、今もまだ神の前に私は愚かで醜く罪深く不敬虔な存在だ、何とみじめな者かと。皆さんはそのような思い、そのような経験をされたことがありますか？私たちはそのように神の前に自分自身を見て行く必要があるのです。それが現実だからです。自分自身を神の前に正しく見たときに、そこに見えるのは自分の醜さ罪深さです。それは私たちのうちに嘆きを起こし、その嘆きは同時に私たちに悔い改めを起こさせるのです。ああ私は何と醜いのだろうと終わらないのが私たちです。だから、神さま、この醜い罪深い私を、不敬虔な私を、あなたの基準に満ちることができない私をどうぞ赦してくださいと、主の前に出て行きます。それがみことばを通して神が私たちに教えることです。パウロはIIコリント7：10でこのように言っています。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、」と。ニネベの町を思い出してください。ニネベの町にヨナがメッセージを携えて行きました。行きたくなかったけれど、ヨナはメッセージを伝えて歩きました、神の滅びがやってくると。そのとき人々は荒布を身にまとい灰をかぶって、これは悲しみの表われですが、彼らは悔い改めたのです。激しい怒りをもって彼らに臨もうとする神の前に彼らは自らの罪のゆえに嘆きをもったのです。ニネベの王は人々にその嘆きに加わるように命令をしました。すべての人が悲しみ、主の前に悔い改め、神のあわれみを求めるようにと。私たちが生きているこの世の中は、私たちが悲しませることがらから目をそむけ、そのようなことを忘れ、私たちが良いと思うことに目を向けなさいと言います。プラス思考そのものです。けれども、イエスがここではっきり言われるのは全く反対のことです。天国に属する人はその反対をしなさい、その反対をしていないとおかしい、なぜなら、神の子どもたちは神がどのようなお方であるのかをはっきりと理解し、同時に、神が求めている基準がどういうものかを正確に知っているからです。それゆえに、継続的な嘆きが私たちのうちに起こるのです。もし一瞬でも、私は霊的に何とすばらしいのだろうと思うなら、もう一度あなたは霊的な鏡の前に立つ必要があります。もう一度、みことばの基準を見て、あなたの生涯がどんなものかを調べる必要があります。醜いのです、罪との葛藤があるから。確かに神は赦して下さっているけれど、神の前に今立つなら、私たちは汚れをもっているゆえに深く悲しみ嘆きをもつ者なのです。その嘆きは常に私たちのひざを地面につけさせ、神の前に叫ばせませ、主よ、このような愚かな者をどうぞ赦してください、どうぞ、私の犯したこの罪をあな

たが赦してください、あなたに従って行きたいと私は思いますからと。パウロはそのようにしていました。ローマ7章のところで…。ヨハネは言いました、Iヨハネ1：9で「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」と、私たちに罪がなくなったのではないから、罪を犯したときはその罪をしっかりと捉えて神がそれに対して宣言されるのと同じ宣言をしなさい、告白しなさいと言うのです。それは自分の醜さをはっきり知らなければできないことです。

(2) この世の他の人たちの罪を見て嘆く

神がどのようなお方であるのかという正しい理解は、私たちの周りに生きている人たちが神の基準を破って生きているその姿に喜びを見い出しません。見捨てることができません。むしろそれは、深い悲しみを私たちに起こさせます。ダニエルはダニエル書の9章で非常にすばらしい祈りをささげます。ここで見る時間はありませんが、ぜひ読んでみてください。すばらしい悔い改めと告白の祈りです。もちろん、自分個人の祈りもありますが、彼はイスラエルの民のために悔い改めの祈りをするのです。荒布を着て灰をかぶって断食しながら祈るのです。悲しかったからです。イスラエルが犯したその罪に対して…。ダニエルは自分の民の罪を心から深く嘆いていたのです。詩篇の著者は119：136でこのように言います。「私の目から涙が川のように流れます。彼らがあなたのみおしえを守らないからです。」、自分の罪ではない、この詩篇の著者は他の人たちが犯すその罪を見て涙が止まらないのです。私たちが生きているこの社会も同じように神に対して罪を犯し続けながら生きています。そして、それは私たちの目にも涙を浮かべさせないといけません。このことは私に、イエスの姿を思い起こさせました。イエスがご自身のきよい町、エルサレムに対して流された涙です。イエスが棕櫚の日曜日、ろばの子に乗ってベタニヤから出てオリーブ山の方に上って行かれました。周りにはそのときエルサレムに来ていた多くの人たちが大声をあげて喜んでいました。ホサナ！ホサナ！と。パレードでした。そのときイエスは人々と同じ思いだったのでしょうか？違います、オリーブ山の頂上付近まで来られたイエスはエルサレムの町を見て泣いたのです。ルカ19：41にそのことが記されています。「エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、」、ここで使われている「泣いて」ということばもまた、非常に多くの苦しみ悲しみのゆえに大声をあげて泣くその姿を表わしています。なぜ、人々が喜んでいいるその中で、イエスはオリーブ山からヘロデの豪華な神殿とエルサレムの町を見て泣かれたのでしょうか？イエスは人々の罪が悲しかったのです。イエスをこうして歓迎しながらも主として認めることがなかった、その人々の罪に、それゆえにやがて滅びて行ってしまうエルサレムの町に対して。イエスはもう一度泣いておられます。皆さんご存じのところですか。ヨハネの福音書に出て来ます。ラザロが死んだときです。それはラザロが死んだことが悲しかったからではありません。なぜなら、イエスはもともとラザロをよみがえらせるためにラザロが病気のうちには行かなかったのです。死んでから行こうと最初から計画されていたのです。だから、死んだことが悲しかったのではない、では、なぜイエスは泣いたのでしょうか？ロイド・ジョーンズ博士はそのことをこのように説明しています。「主はこの忌まわしく邪悪で憎むべき罪というものを見たのである。罪はすでに人の生活に入り込み、人の生活に死を連れ込んだ。そして、人の生活を覆し、人の生活を不幸にしている。それだから、主は泣いたのである。」と。これからよみがえらせようとしているラザロを知っていながら周りの人は深い悲しみの中にあつたのです。

神の御国に入る者、その人はこの神の御国の王であるお方と同じ特徴をもっています。天国に属する人は、いったい何が神に悲しみを起こさせるのかをよく知っているのです。そして、それと同じことに悲しみを抱くのです。それゆえに、その人は自分の個人の罪にだけ悲しむのではなく、周りの人たちの罪に対しても悲しみを抱くのです。イエスはここで「悲しむ者」ということばに現在形の動詞を使っています。悲しみ続けるということです。この悲しみは一時的なものではないのです。継続して起こるものでそれがその人の人生の特徴だと言うのです。その人こそが幸いだと言います。なぜなら、その人は神がもっているきよい基準と同じところに立っているからです。神がもっている罪に対する憎しみ、苦々しさを同じようにもっているからです。それゆえに、この人は自分自身を、そして、周りの人たちを不従順というものに従属させる罪の力に対して深い嘆きをもっているのです。私たちが今生きているこの時代、特に、この時代の教会において、残念ながら、私たちはこのような悲しみを強調することを忘れてしまっているのではないかと思います。教会は言います、また、この世は言うのです、笑いなさい、喜びなさい、笑顔でい続けなさい、罪があっても、その罪の報いがあったとしても、あなたは笑顔でいられるから、そんなことは忘れてもっと良いことに目を向けなさいと…。しかし、イエスは言われます、楽しいことを思い浮かべるのではなく、自分の罪ではなく神の愛や神の恵みや神の赦しに思いを向けなさいと言うのではなく、嘆きなさい、泣きなさい、悲しみなさい、あなたの犯したその罪にゆえにと。私たちが自分の罪から目をそむけて本当の幸いがあると、一瞬たりとも思っはけません。罪のある

ところに幸せはないのです。私たちが本当にその罪に目を向けたとき、そして、それをしっかり悲しむような神の基準を自分もったときに、私たちは本当の赦しを自分のものとしているのです。私たちは救われたときにそうしました。そして、その態度は継続するのです、私たちが罪の支配から解放されるそのときまでです。ヤコブはこのことを教会に当てはめてこのように言います。ヤコブ4：8－10「**神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。：9 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。：10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。」**と。私は皆さんがみじめになってくださいと勧めているのではありません。嘆き悲しんで自己憐憫に陥ってくださいますと言っているのでもありません。笑顔でいることや喜びをもつことが悪いといっているのでもないのです。私が皆さんに伝えたいこと、また、イエスがここで言われているのは、本当の幸いは罪を深く嘆く人にしか与えられないということです。皆さんがその嘆きなしに幸いを得ることができると考えているなら、皆さんはイエスの教えとは外れるところにいます。

クリスチャンがもつ喜びというのは見せかけの陽気さではありません。私たちが罪に対する適当な態度をもっているとき、そこには本当の幸福は現われません。本当の幸い、喜びというのは私たちが罪を嘆くときに与えられる、なぜなら、その罪の嘆きは私たちに悔い改めを起こさせ、その悔い改めによって私たちは神の赦しと神からの受け入れを得るからです。そして、神は私たちを慰め、私たちをあわれみ、私たちを赦すのです。だから、4節の後半はこのように言います、「**その人は慰められるからです。」**と。私たちにはこの慰めが確約されています。それゆえに、継続的な悲しみをもっている人は幸いなのです。天国に属する人には慰めが確かなものとして約束されています。だから、悲しみなさい、自らの罪を、周りの人たちの罪を、神と同じ基準をもってこの地上を生きて行きなさいと、イエスがここで言われていることばは非常に強制的なものです。つまり、悲しむ者にしか幸いはないと言っているのです。神が霊的嘆きをもっている人たちに対して、このような慰めを与えてくださる、だから、イエスはこのように強調した大胆な発言をされるのです。

この「慰める」ということばは、励ます、勧める、助けるということばに訳すことができることばです。もともとはこのことばは、横に呼ばれるという意味をもっています。横に呼ばれて横でいろいろな励ましを与えてくれるその姿を表わす、非常に具体的なことです。神を知らない者たちが嘆くとき、そこには慰めはありません。なぜなら、だれも横に来て助けてくれる人がいないからです。その霊的状态、具体的悲しみを根本的に解決してくれる方をしらないからです。だから、キャプテンフックのように彼らは空を飛ぶことができない、この地上に置き去りにされるのです。だから、この地上の人たちにとって悲しみほど辛いものはないのです。だれも本当に助けてくれる人を知らないからです。けれども、クリスチャンにとって、天国に属する人たちにとって、どのような希望があるのか、私たちが嘆くときに私たちの横には神がいるのです。パウロはⅡコリント1：3－4でこのように言います。「**私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。：4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」**、私たちには慰めが約束されているだけでなく、今もその慰めが具体的に与えられているのだと。ですから、私たちが悲しむことが幸いなのです。なぜなら、神が私たちの横にいて私たちに励まし私たちに勧め私たちに助けてくれるのです。神だけではありません。イエスはヨハネの福音書でこのように言われました。14：16「**わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」**、「もうひとりの助け主」は同じことば、もうひとりの慰め主ということです。「もうひとり」とはイエスご自身も助け主ですが、それ以外に聖霊を私たちに与えてくださるということです。つまり、私たちクリスチャンには三位一体の神の慰めがあるのです。父なる神は私たちに慰めてくださるし、子なる神も私たちに慰めてくださっているし、聖霊なる神も私たちに慰めてくださっているのです。ここで言われている「慰め」は未来形が使われています。つまり、この完全な成就のときというのは、神の御国がやって来るそのときに起こるのだと教えているのです。皆さんよくご存じの箇所、黙示録21：4でこの与えられる永遠の御国についてヨハネは説明してくれます。「**彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」**と。けれども、私たちクリスチャンは今もそのすばらしい慰めの中にいるのです。Ⅱテサロニケ2：16－17に「**どうか、私たちの主イエス・キリストであり、私たちの父なる神である方、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方ご自身が、：17 あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。」**とある通りです。ある注解者はこのように言いました。「神の前に忠実な真実な子どもたちというのは、いつも自分の罪深さのゆえに心砕かれています。そして、長く彼が生きれば生きるほどその人は主にあってより成熟

し、それゆえに彼にとって歓喜をもって生活することはより困難になって来る。なぜなら、その人は神の愛と神のあわれみをより良く見るのと同時に、自分自身の、そして、この世の罪深さをより良く理解して行くからだ。私たちが神の恵みにあって成長して行くのは、同時に、私たちは自分自身の罪に対してより深い認識を得て行くことだ。」と、さらに続けて言います。「成熟した生涯のしるしは罪がないことではありません。それは天国において与えられるものです。けれども、成熟したクリスチャンの生涯のしるしというのは、罪深さをよく知って行くところに現われます。」。

皆さん、神の御国に属しておられますか？それなら、皆さんは罪を嘆いておられるはずで、その嘆きは私たちにすばらしい希望をもたらすのです。なぜなら、私たちを慰めてくださる方が横にいることを私たちが知っているからです。私たちは神の栄光のために生きています。いつの日か、イエス・キリストの似姿になることを目指して生きています。私たちはクリスチャンとして私たちの主がとった行動をできるだけこの地上で真似て行きたいと思っています。そこで、私たちは考えなければいけません。一つ質問させてください。今、頭の中で絵を描いてください。イエスの顔です。私が見たいのはどのような目鼻立ちをしているかではなくイエスの表情です。笑っていますか？怒っていますか？泣いていますか？どんな顔をしていますか？もし、皆さんが今描かれた絵が笑顔であるなら、残念ながらその絵はみことばに沿った絵ではありません。聖書を通して神が笑顔でおられるところは見ることができません。神はこの地上において怒っています。イエスはこの地上において泣きました。イエスはこの地上において飢えや渴きを覚えられ、いろいろな人間的な感情を表わされたことが福音書の中に見ます。けれども、そこに記されるイエスは一度たりとも笑って喜びを表わしたことはありませんでした。なぜでしょう？イザヤ53：3はイエスをこのように呼んでいます。「**彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。**」、イエスは悲しみの人だったのです。イエスはこの地上を歩まれて人々の罪を見て、その罪を見て笑顔でいることはできなかったのです。この世は皆さんに言います、ピーターパンのようになりなさい、楽しいことを思い浮かべなさい、そうすれば幸せになりますよと。でも、このみことばは言います。イエスのようになりなさい、自分の罪を、周りの人の罪を罪としてしっかり受け止め、それを嘆きなさい、そして、主の前に悔い改め、主の前に正しくあるように生きて行きなさいと。私たちの生涯は悲しみに満ちているべきです。